

“Ethical Dative”

—Shakespeare の用法を中心として—

山川喜久男

I

言語の統語的機構が理知的な意味内容の合目的な伝達の方向に向かって発達し進展していることは、言語史上の一般的動向であるが、総合的表現法の段階から分析的表現法の段階に大きく飛躍した英語の場合、それはとくに顕著に認められる現象である。もちろん、分析的で合目的な言語表現が理知的意味内容の伝達の用にだけ供せられるのではなく、とくに口語的な文脈では、人の情意的意味内容を伝達することが必要なことがあり、またそれが意図される場合がある。そういう情意表現のための言語形式も分析的な統語構造の一要素として配置されるのが現代語の一般的傾向といえるが、とくに英語の場合、その傾向が特徴的といえるほどに深化している。英語を中心として関連する統語現象を歴史的に、また比較的に観察するとき、上のような特徴をかなり鮮明に具現していると考えられるのは、ここにとりあげようとしている“Ethical Dative”である。

“Ethical dative”という術語は、ラテン語の“*dativus ethicus*”に由来することからも知られるように、この名で指されている1人称および2人称の人称代名詞の与格⁽¹⁾

(1) OED, s. v. ETHICAL 3 によれば、英語の“ethical dative”が1849年のL. Schmitz, *Latin Grammar* に用いられたと記録されている。なお、ラテン語の *ethicus* はギリシャ語の *ἠθικός* にさかのぼるが、その基は *ἦθος* である。それは、ちょうどラテン語 *mos* (cf. *E moral*) と同様に、複数形で人間の“*disposition, temper, character*”を意味する名詞であるが、形容詞形の *ἠθικός* も、広義として、*διανοητικός* (=intellectual) に対立する観念を包含しうる語として、文法用語に適用されたものである。したがって、“ethical dative”は日本語で「心性的〔心情的・情感的・喚情的〕与格」とでも訳されるべ

(Dative case) の冗語的 (pleonastic) 用法は、ラテン語に見られたものであり、またギリシャ語ではいっそう普通であった。つぎに、まずギリシャ語の用例をあげる。(以下、本章にあげるギリシャ語・ラテン語・ドイツ語・フランス語および初期英語からの用例には、それぞれ現代英語訳を添えることにする。英語以外の諸言語や初期英語でかなり自由に用いられている Ethical dative が英語による該当する構造にそのまま写し出されえない点に注意するためである。)

(1) *Μέμνησθέ μοι μὴ θορυβεῖν.*—Plato, *Apologia Sokratous* 27 b. ⁽²⁾ (=Pray remember not to make an uproar.)

(2) *Τοιοῦτο ὑμῖν ἐστὶ ἡ τυραννίς, ᾧ Λακκεδαίμονιοι.*—Herodotus v. 92 η. ⁽³⁾
(=Such a thing, you know, is tyranny, O Lacedaemonians!)

ラテン語の例では、

(3) *Quo tantum mihi dexter abis?*—Virgil, *Aeneid* v. 166. ⁽⁴⁾ (=Where, I say, are you going so much to the right?)

(4) *ecce tibi Ausoniae tellus; hanc arripe velis.*—*Ibid.* III. 477. (=Lo, yonder lies the land of Ausonia; seize upon this with your sails.)

これらのギリシャ語やラテン語の例では、1 人称や 2 人称の与格の代名詞が喚情的で詠嘆的な呼びかけや命令の文に用いられており、話者や聴者が述べられている動作によって何らかの利害関係を及ぼされはしないが、話者または聴者自身が叙述内容に注意を向け、あるいは注意を喚起させられている。(4) の *ecce* は英語の *lo* に相当する間投詞であるが、命令法の動詞に近似した語気を帯びている。このラテン語の *ecce* を命令法に対等なものとなせば、続く *tibi* は、英語の口語体に今日なお見られる *Look you./Mind you./Mark you.* におけるような命令法に接する再帰与格 (Reflexive dative) ⁽⁵⁾ に相当するものと解釈できる。この種の再帰与格が動作に対する聴者の関心

きものであるが、本稿では、便宜上、英語の原語によることとした。

(2) Cf. H. W. Smyth, *Greek Grammar* (Harvard, 1963), §1486.

(3) Cf. E. A. Sonnenschein, *The Soul of Grammar* (Cambridge, 1927), §41.

(4) 福村虎治郎『英語態 (Voice) の研究』(北星堂, 1965) p. 268 参照。

(5) 拙論 “The Imperative Accompanied by the Second Personal Pronoun” (*Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences* Vol. 7, 1966) は、この問題を扱ったものである。

を誘う力を発揮するものであり、その限りではここで問題としようとしている Ethical dative に共通している。

このように Ethical dative の用法は古典時代の言語における発声的 (elocutional) 機能の実質を統語形式の上に表現したものと見えるが、ドイツ語やフランス語という近代語においても、同じ情意表現の形式が用いられている。つぎに、ドイツ語とフランス語の Ethical dative の例を 1 例ずつあげる。

(5) Krümmt *mir* kein Haar auf dem Haupt eures Herrn!—Ebner-Eschenbach, *Jakob Szela*, p. 117. (=I warn you, don't you harm a hair on the head of your master.)

(6) On ne l'a pas ouverte depuis mille ans; les gonds ont une croûte de rouille et voyez-*moi* ces deux verrous.—R. Escholier, *La Nuit*, p. 92. (=It has never been opened for a thousand years. The hinges are encrusted with rust—and behold, these two bolts!)

これらの例では、Ethical dative としての 1 人称代名詞が命令法の動詞に直結した位置に表現され、しかもそのあとに客観的な直接の対象をさす目的語が配置されており、外部構造の上では、あたかも与格の 1 人称代名詞が動詞の間接目的語であるかのような観を呈している。しかし、それは実は、動詞に対する間接目的語などという論理的関係を示すものではなく、命令文の中に投入された主観的表現である。このような Ethical dative の表現法は、とくに近代語に採り入れられるとき、対話者相互の直観的心理に基づいて、素朴な表現過程によるものであるが、それが言語の統語構造の中に渾然と統合されている点に、文体上の妙味を感じさせる。

翻って、英語の初期に Ethical dative がどのように用いられたかを眺めてみよう。近代英語 (Modern English) に先立つ古期英語 (Old English) と中期英語 (Middle English) の作品の中には、その主材の性質の関係もあって、このきびきびした口語的な表現法はまれにしか見出されない。つぎのような例では、与格の 1, 2 人称代名詞は述語動詞の意味する動作の動作主と同一人をさし、再帰的に用いられていて、動作の遂行が動作主に対し、物理的または精神的な何らかの影響を及ぼすことを暗示するために表現されている。このような再帰与格 (Reflexive dative) の用法は、初期

(6) Cf. G. O. Curme, *A Grammar of the German Language* (N. Y., 1952), p. 502.

(7) 中平 解『フランス語学新考』(三省堂, 1950) p. 6 参照。

英語においてかなり優勢な統語法であるが、ここで問題としている Ethical dative と同範疇のものとみなすことができない。ただ、動作の記述に人的な活気を添えるという文体的効果を奏している点に、Ethical dativeに通じる性格を認めるべきであろう。

(7) Þy ic þe hyran ne cann,
 ac þu meahþ *þe* forð faran. Ic hæbbe *me* fæstne geleafan
 up to þam ælmihtegan gode þe me mid his earmum worhte,
 —Genesis 542-4 [c. 1000].

(=Therefore I cannot obey you; but you may go forth. I have a firm belief in Almighty God who created me with His arms.)

(8) Ic afunde *me* dauid æfter minre heortan þæt he ealne minne willan mid weorcum gefremme. —Ælfric, *Lives of Saints* XLIII. 30-1 [1025-50].
 (=I have found David after my own heart so that he may perform all my will by his works.)

(9) ‘Ðanne ðu wilt 3ibidden ðe,’ he sade, ‘ga into þine bedde, and scette þe dure uppen ðe, and bidde *þe* swa to þine fader, godd almihtin…’ —*Vices and Virtues* 143. 2-4 [c. 1200]. (=“When you will pray,” he said, “go into your bed, shut the door on you, and pray so to your Father, God Almighty.”)

(10) So wiste I *me* non other red,
 Bot as it were a man forfare
 Unto the wode I gan to fare,
 —Gower, *Confessio Amantis* I. 108-110 [c. 1390].

(=So I did not know what else to do but went to the wood as if I were a worn-out man.)

しかし、これらの例における *me*, *þe* [ðe] は、要するに利害の与格 (Dative of interest) が再帰的に用いられたものであり、その限りにおいて、叙述内容から論理的关系を絶たれているものではない。本来、非論理的な Ethical dative の用法は、上のような、なお論理性を保持している利害の与格から推移したひとつの結果として考えられる。そのような推移・離脱の結果としての現象がつぎの例に見られるのであるが、ここでは、客観的事態の写描の最中に、*me* という主観的要素が突如として投入されている。

(11) & ryȝt bifore þe hors fete þay fel on hym alle
 & worried *me* þis wyly wyth a wroth noyse.

—*Sir Gawayn and The Green Knight* 1904-5 [c. 1390].

(=And they [*i. e.* the hounds] all fell on him [*i. e.* the fox] just before the horse's feet and worried this wily animal with a fierce noise.)

作者はすさまじい喧騒の中に躍動している狐狩りの情景に思わずわが身を投げ込んでいるのであり、外形上は *me* は他動詞の *worried* に直結して、あたかも現実に意味上の影響を被っている対象をさすものであるかのように用いられており、説話内容という客体と説話者という主体とが渾然と一体化した表現が成り立っている。14 世紀後葉において頭韻詩の伝統に基づいた物語り詩体が発達したが、このように、英語が生彩に富む描写力をもつ文学的表現の具として立ち現われた時に及んで、英語における Ethical dative はようやくその活路を見出したわけである。

統語法ないし修辞法で強意のための冗語法は近代語に数多く発達しているが、この Ethical dative は、論理的分析に頼ったり、修辭的技巧に走ろうとする発想以前の、直情的で人間味に富み、したがって庶民的心理に基づく強意法というべきである。この強意的冗語法が現代英語 (Present-day English) の標準文体に影を潜めるようになったのは、意味の曖昧さを避け、表現の合理化に赴こうとする動向の結果であるが、一方また、15 世紀末までの初期英語の段階では、それが十分に顕在化されるには至っていなかった。イギリス人が中世の精神的桎梏から脱却して、無限に自在な人間性の発揚を目指し、潑刺とした人間の性能の開発とギリシャ・ローマの人文主義の成果の摂取に心掛け、アングロ・サクソンの風土のルネッサンスの主潮をみごとに開花させたのは、エリザベス朝 (1558-1603) においてである。そのルネッサンス英国を代表する国民的詩人劇作家 William Shakespeare (1564-1616) の英語に、Ethical dative が盛んに、そして生き生きと用いられていることは、当時におけるイギリスの時代相を象徴しているように考えられて、興味深い。以下、Shakespeare に見られるおよそ 77 個の Ethical dative について、その統語的特徴と表現効果を観察し、この冗語法の性格と、その英語における適応性を探ってみようと思う。

II

Shakespeare の全作品中に、Ethical dative は、*me* と *you* とを合わせて、およ

そ 77 回用いられている。⁽⁸⁾ここに「およそ」としたのは、Ethical dative の認定が微妙であり、その範囲は純粋な狭義の Ethical dative から利害の与格 (Dative of interest) と容易に識別しがたいものに至って性格に変動があるため、77 という数も筆者の主観的判断と評価によっており、絶対的客観性をもったものではないことを意味している。文体的に言って、軽妙で口語的な喜劇調の文脈に Ethical dative が多く見られるのが大きな特徴である。中に、激越した高調の台詞のうちに現われることもあるが、一般的には、砕けた諧謔的調子の中に見られるもののほうが遙かに多い。韻文の部分と散文の部分とに分けてみれば、77 回のうち、散文の行中に現われるのは、わずかに 25 パーセントの 19 回にすぎず、ほかはすべて散文体中に用いられている。注目されるのは、Ethical dative を含む台詞をもっとも多く語る人物が、Shakespeare の喜劇人物中の最大傑作 Falstaff であり、その例は 14 回 (*Merry W.*⁽⁹⁾ に 2 回、1 *Hen. IV* に 3 回、2 *Hen. IV* に 9 回) にも及んでいる。この事実は、Ethical dative

(8) 調査に当たっては、主として、A. Schmidt, *Shakespeare-Lexicon* (Berlin, 1923), s. v. I, You に準拠し、さらに補助的に W. Franz, *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa* (Halle, 1939), §§ 293, 294 と E. A. Abbott, *A Shakespearean Grammar* (London, 1929), § 220 を参考とした。

(9) 本稿に引用する Shakespeare の作品名はつぎの略記法によることとする。各作品の末尾に〔 〕内に付記したのは、それぞれの製作年号である。*Two Gent.* = *The Two Gentlemen of Verona* [1594-5]/*Merry W.* = *The Merry Wives of Windsor* [1600-1]/*Meas. for M.* = *Measure for Measure* [1604-5]/*Com. Err.* = *The Comedy of Errors* [1592-3]/*Much Ado* = *Much Ado about Nothing* [1598-9]/*L. L.* = *Love's Labour's Lost* [1594-5]/*Mids. N. D.* = *A Midsummer-Night's Dream* [1593-6]/*Merch. V.* = *The Merchant of Venice* [1596-7]/*Tam. Shr.* = *The Taming of the Shrew* [1593-4]/*All's Well* = *All's Well that Ends Well* [1602-3]/*Twel. N.* = *Twelfth Night; or, What You Will* [1599-1600]/*Wint. T.* = *The Winter's Tale* [1610-1]/*John* = *The Life and Death of King John* [1596-7]/1 *Hen. IV* = *The First Part of King Henry IV.* [1597-8]/2 *Hen. IV* = *The Second Part of King Henry IV.* [1597-8]/*Hen. V* = *The Life of King Henry V.* [1598-9]/1 *Hen. VI* = *The First Part of King Henry VI.* [1591-2]/2 *Hen. VI* = *The Second Part of King Henry VI.* [1590-1]/*Rich. III* = *The Tragedy of King Richard III.* [1592-3]/*Tr. & Cr.* = *Troilus and Cressida* [1601-2]/*Rom. & Jul.* = *Romeo and Juliet* [1594-5]/*Timon* = *Timon of Athens* [1607-8]/*Jul. Cæs.* = *Julius Cæsar* [1599-1600]/*Macb.* = *Macbeth* [1605-6]/*Ham.* = *Hamlet, Prince of Denmark* [1600-1]/*Lear* = *King Lear* [1605-6]/*Oth.* = *Othello, the Moor of Venice* [1604-5].

という冗語的強意法の帯びる素朴な人間味と生き生きとした口語的潑刺さを反映している。

つぎに、77 回の Ethical dative の例は、59 回の me と 18 回の you とからなる。このことから、1 人称の me が圧倒的に多いことと、2 人称代名詞として、本来の単数形 thee の用例が見られないことに注意されよう。それは、第 1 に Ethical dative の用いられる機会は、対話の 1 次的主体である話者自体が伝達内容に引き込まれる場合だからである。聴者を伝達内容に引き込ませようとする場合は命令文のことが多く、その場合には、*Sit thee downe (Jul Cæs. v. v. 4)/Get thee away (Com. Err. I. ii. 16)/hye (=hie) thee (Rich. III iv. i. 44)/heare thee (Merch. V. II. ii. 189)* のように、与格は多少とも利害関係の対象を示す機能を帯びて、いわゆる再帰与格 (Reflexive dative) となり、ここでいう Ethical dative の範疇をはみ出すこととなる。このように、もともと 2 人称代名詞の与格形が Ethical dative として用いられる文脈が 1 人称代名詞の場合にくらべ少ないのであるが、それ以外に、当時すでに thee (および thou, thy, thine) が用いられるのは、話者がとくに目下の者に対する場合や、親しみ・軽蔑・威嚇その他特別な感情を込めて呼び掛ける場合に制限されるようになっており、一般には、聴者が一人の場合でも、本来の複数形の you (および your, yours) が代わって用いられることが多くなっている。少なくとも thee の用いられるのは、話者が聴者に対して特別な感情を抱いていると意識した場合であり、Ethical dative のように口語調の文脈で直観的に発話中に投入される語としては、2 人称の人称代名詞として一般化しつつあった you が用いられたものと推定される。Shakespeare 以降において thee が Ethical dative として用いられた例が見出されないのは、このような事情による。

上に Ethical dative と命令法の動詞に接する 2 人称代名詞の再帰与格との関連性に触れたが、Ethical dative としての 1 人称代名詞 me を含む表現が命令法の動詞に接していることの多い事実も注意されなければならない。59 個の me の用例のうち、半数以上の 30 個の me が命令文に用いられている。本来、命令法は聴者の速刻の行動を促す話者の直接的意向の動詞的表現であり、それと Ethical dative としての me とは機能と語調の上でたがいに調和すべきはずのものである。

先にも述べたように、Ethical dative を認定するに当たって、微妙に関係してくるのは利害の与格 (Dative of interest) であり、具体的な現象について両者の識別は主観的判断に委ねられざるをえないことがある。Ethical dative とみなされるものでも、純粋に主観的情意的表現に留まるということはむしろ少ないのであって、多少とも客

観的な意味機能が介入してくることが多いのである。本来、意味上で広義の利害の与格に包含されるべきものに、統語構造の上で直接目的語に並列する間接目的語としての与格がある。むしろ、統語上優勢な類型の枠内にいわば疑似間接目的語として適宜割り込められるところに、Ethical dative の表現上の妙味があるともいえる。このような Ethical dative と利害の与格ないし間接目的語としての与格との関連は、人為的な面をはらんでいるが、Ethical dative の統語的性格を考察するに当たって見逃すことのできない要点である。

つぎに、一応、Shakespeare がその作品中に用いている Ethical dative を、まず *me* と *you* とに分け、それぞれの現われる述語構造の型に従って再分してみよう。() 内に付記した数字は、各項の用例の回数を示す。

A. *me* (59).

- (i) “他動詞 + *me* + 目的語” (30).
- (ia) “他動詞 + *me* + 目的語 + 前置詞付きの句” (7).
- (ib) “他動詞 + *me* + 副詞 + 目的語” (4).
- (ic) “他動詞 + *me* + 目的語 + 副詞” (1).
- (ii) “自動詞 + *me*” (4).
- (iia) “自動詞 + *me* + 前置詞付きの句” (10).
- (iib) “自動詞 + *me* + 副詞” (3).

B. *you* (18).

- (i) “他動詞 + *you* + 目的語” (9).
- (ia) “他動詞 + *you* + 間接目的語 + 直接目的語” (1).
- (ii) “自動詞 + *you*” (6).
- (iia) “自動詞 + *you* + 副詞” (2).

以上の類別に従って、順次 Shakespeare における Ethical dative の具体的現象を観察してゆくこととする。

A. *me*

(i) “他動詞 + *me* + 目的語”

他動詞としての述語動詞と目的語との間に Ethical dative としての *me* が投入されるこの形式は、Shakespeare における Ethical dative のうちもっとも普通なもの

である。この場合の *me* は、まず、動詞の表わす意味から実際に利害関係の影響を受け、統語上、続く直接目的語に対し間接目的語とみなされ、したがって純粋な Ethical dative とはいえない、つぎのような例における *me* と比較されなければならない。

(1) Do your Offices, do your offices: M. Fang, & M. Snare, do *me*, do ⁽¹⁰⁾*me*, do *me* your Offices. —2 *Hen. IV* II. i. 44-5. (さあ、お役目を、お役目を。フングさんとスネアさん、さあさあ、お役目をなすってください)

旗亭のおかみが Falstaff たちがやってくるのを見て、小役人の Fang と Snare に、引っ捕まえてくれるようにとせがんでいる。とくに、初めの命令文に間接目的語として *me* を表わしていないのに、あとの命令文に、それをことさらに3度も繰り返して表現しているところに、話者の聴者たちを激しくせき立てる性急な気持ちが顕示されている。この *me* は統語上 *do* に対しては間接目的語の関係にあり、意味上では明らかに 'for me,' 'in my favour' に相当する利害の与格であるが、この文脈ではとくに強意のための情意的機能を負わせられている点で、Ethical dative に通じている。

このような現象から、動詞が普通二重目的語を伴ういわゆる与格動詞 (Dative verb) とはいえないものであるが、なおその直後に表現される *me* が二重目的語構造中の要素であるかのような外観を呈し、しかもなお利害の与格としての意味機能をおのずと暗示している、つぎのような例に移行する。

(2) Looke you Sir,
Enquire *me* first what Danskers are in Paris;
And how, and who; what meanes; and where they keepe:
What company, at what expence: ...

—*Hamlet*. II. i. 6-9.

(よいか、まず、パリーにはどのようなデンマーク人がいるのか、どんな暮しをし、何という名前か、どれほどの財産があって、どこに住んでいて、どういう仲間と付き合い、どれくらいの費用を使っているか、を尋ねてみてくれ)

(10) 本稿における Shakespeare からの引用は、H. Kökeritz, ed.: *Mr. William Shakespeares Comedies, Histories, & Tragedies: A facsimile edition of the First Folio* (Yale U. P., 1954) によった。ただし、*Tr. & Cr.* は上記のテキストに収録されていないので、この作品からの引用に限っては、W. A. Wright, ed.: *The Works of William Shakespeare: The Globe Edition* (London, 1949) によることとした。

饒舌な老侍従長 Polonius がパリーにいる息子 Laertes の行状を家来 Reynaldo にそれとなく探らせようとして、言い含めている。この文脈では、*Enquire me...* の *me* は実質的に 'for me' の意味を表わしているとはいえないであろう。それは、Polonius が自分の話す言葉に Reynaldo の注意を引きつけようとして挿入した Ethical dative とみなしうるものであるが、同時に、この挿入によってこの種の *me* のもつ利害の与格としての潜在的機能が自然に暗示させられている。この代名詞の意味上の効果は日本語の「…してくれ」という複合動詞形のものに相当している。一般に、Ethical dative の表現法は、意味と言語形式の対応という点では非分析的であるが、なお、日本語の場合にくらべるときには、少なくとも外部構造の上からは、西欧語特有の分析的性格を露呈しているというべきであろう。

つぎの例となると、構造上からは、*me* の動詞に対する関係はいっそう偶発的のように考えられるが、なお、聴者にたたきつけるような強意表現の底に利害の与格としての本源的機能が潜んでいる。

(3)

You shall marke

Many a dutious and knee-crooking knaue;
That (doting on his owne obsequious bondage)
Weares out his time, much like his Masters Asse,
For naught but Prouender, & when he's old Casheer'd.
Whip *me* such honest knaues. ...

—*Oth.* i. i. 44-9.

(世間にはずいぶんと忠義一途でぺこぺことき使われているやからもいるだろう。そういうやからは、自分の卑屈な奴隷の鞭に甘んじ、主人に飼われた驢馬みたいに一生飼葉だけをもって食いつなぎ、老いぼれるとほうり出される。そんな馬鹿正直者はぶちのめしてくれたい)

Desdemona に心を寄せ、かねて Iago にとりなしを頼んでいた Roderigo が、Desdemona が Iago の主 Othelloのもとに走ったと聞き、Iago を責める。その時、Iago が Roderigo に答えている台詞の1節である。Whip に見あたかもその直接目的語であるかのように続く *me* は、話者の体に食い込む痛烈さのほどばしりであると同時に、聴者の耳にも直接その力を鳴り響かせたことであろう。

しかし、Ethical dative の統語的強意法としての妙味は、それがもっと疑似間接目的語としての外観を鮮明にしている、つぎのような現象にある。

(4) Come sir, leaue *me* your snatches, and yeeld mee a direct answer.
 —*Meas. for M.* iv. ii. 6-7. (おいおい, そんな洒落はよして, まっすぐ返事をしてくれ)

牢役人が囚人の Pompey に向かっていう言葉である。問題の *me* に先立つ leaue [leave] 自体, この文脈における意味ではないが, 二重目的語を従えうる語である。しかも, それが現われている等位節のあとの一方には, 正真正銘の与格動詞 yeeld [yield] (=give) に接して間接目的語としての mee [me] が用いられており, 軽妙な調子で語られる台詞のうちに, 作者 Shakespeare の言語芸術家としての技巧がうかがわれる。

つぎの例における2個の Ethical dative のうち, 初めの *me* も同様に疑似間接目的語といえるものである。

(5) Why then build *me* thy fortunes vpon the basis of valour. Challenge *me* the Counts youth to fight with him, hurt him in eleuen places, ...—*Twel. N.* III. ii. 34-7. (だったら, 勇気をもとでに身代をこしらえてみるさ。あの公爵の若党に決闘を申し込んで, 11箇所も傷を負わせてやるといい)

伯爵家の娘 Olivia の叔父 Toby が Olivia の恋に嫉妬する低能の武士 Andrew に語る言葉である。初めの文における build *me*~は普通 'build~for me' の意味になりうる構文であるが, そのような構文の型の中に Ethical dative としての *me* が割り込められている。

例(5)のあとの文における challenge *me*...の *me* は, そのような他の統語形式への関与⁽¹¹⁾ということの考えられない, 本来的な Ethical dative の例といえるが, 同種の例をあげる前に, なお, 統語上注意されるものを付け加えておく。

(6) *Cap.* Where haue you bin gadding?
Iul. Where I haue learnt *me* to repent the sin
 Of disobedient opposition

(11) *Twel. N.* (II. iii. 136) に1例だけ to challenge *him* the field という構造が見られるが, たいていの校訂者は to challenge *him to the field* とし, おそらく to challenge *him to field* とすべきものであろうと, Schmidt (*op. cit.*, s. v. CHALLENGE 3) が注記している。

To you and your behests, ...

—*Rom. & Jul.* iv. ii. 15-9.

(カピュレット『どこをほっつき歩いていたのか』ジュリエット『お父さんのおおせに背いた不孝の罪を悔むことを習ったところです』)

いやな結婚を無理強いされている Juliet と父の Capulet との間答である。Juliet の答える文にある *me* は、'for myself' ほどの意味を含む再帰用法の利害の与格といってもさしつかえないものである。しかし、統語上には無用の語であり、ただ話者が自分のなしてきた行動の報告に何ほどかの強勢を加える効果を感じさせる点で、Ethical dative とみなすことができる。

つぎに、Ethical dative として純粋度の強いもので特徴的な例を2例あげよう。

(7) Marry, before he fell downe, when he perceiu'd the common Heard was glad he refus'd the Crowne, he pluckt *me* ope his Doublet, and offer'd them his Throat to cut: ...—*Jul. Cæs.* i. ii. 265-8. (それがね、倒れる前に、自分が王冠を斥けるのに平民どもが喜ぶのを見たとき、さっと下着の前を引き明けて、公衆に向かってこののどを切れと言いましたよ)

Caesar が群衆の面前で Antonius から3度王冠を捧げられてそれを斥けたときの情景を目撃していた Casca がそれを皮肉な口調で Brutus に告げている。ここでは他動詞の *pluckt* [plucked] に目的叙述語としての形容詞 *ope* (=open) が添えられているが、その間に Ethical dative として *me* を挿入したことは、陳述に迫真的な生気を帯びさせている。ちょうど話者が勢いついて思わず話に自分の身振りを交える場合のようである。

(8) with an absolute Sir, not I
The cloudy Messenger turnes *me* his backe,
And hums, as who should say, you'l rue the time
That clogges me with this Answer.

—*Macb.* iii. vi. 40-3.

(断固とした「伺いません」という答えを聞くと、使いの者は顔を曇らせて、さっと背を向け、「こんな返事を持って帰らせて、今に後悔するぞ」とでも言うかのように呟いたそうです)

英国王の援助を求め Macbeth 討伐の兵をあげようとする Macduff を召喚しようとして、Macbeth が使者を向けるが、Macduff はそれを断わる。そのときの模様を、貴族がそれを目撃しているかのように写實的に語っている。turnes [turns] とその目的語の his backe [back] との間に Ethical dative としての me を表現して、あたかも話者自身がその会見の場に居合わせているかのように、描写に迫真的な生彩を加えている。

そのほか、“他動詞 + me + 目的語”型に属する例を要所だけに限って摘記しておく。me をカッコに包んでいる2例は、Globe Edition には me が見られるが、First Folio にそれが省かれていることを示す。

he makes *me* no more adoe—*Two Gent.* iv. iv. 30 (そいつめそれ以上わめき立てもせず…)/humor *me* the angels—*Merry W.* i. iii. 64 (その天使様のご機嫌を伺ってくれよ)/With Triall-fire touch *me* his finger end—*ibid.* v. v. 88 (試し火をそいつの指先きにくっつけてみな)/this new Gouvernor Awakes *me* all the inrolled penalties—*Meas. for M.* i. ii. 169-70 (この新任の名代が蔵入りしてしまっている昔の法律を一々たたき起こし…)/Studie *me* how to please the eye indeede—*L. L. L.* i. i. 80 (目を楽しますすべをご研究なさいませ)/The skilfull shepheard pil'd *me* certaine wands—*Merch.* V. i. iii. 85 (この抜け目のない羊飼いは木の枝の皮をぐいとむいて…)/sayst *me* so…?—*Tam. Shr.* i. ii. 190 (そうおっしゃるのですか)/deliuer *me* this paper—*All's Well* v. ii. 16 (この手紙を届けてくださいね)/heare *me* this—*Twel. N.* v. i. 123 (まあ、お聞きなさい) [ただし、me と this をともに二重対格と解することもできる]/Imagine *me*…that I now may be in faire Bohemia—*Wint. T.* iv. i. 19-21 (手前が今美しいボヘミヤに参っているとご想像願います) [me をむしろ対格目的語とみなし、文全体を Imagine *that I now may be*…と Imagine *me* now dwelling…との混成による現象とすべきかもしれない]/he that killes *me* some sixe or scauen dozen of Scots at a Breakfast—*1 Hen. IV* II. iv. 115-6 (あれは朝飯前にスコットランド人を6, 70人も切り殺して…)/I made (*me*) no more adoc—*ibid.* 223 (その時おれは少しも騒がず…) [me は再帰用法]/Rob *me* the Exchequer—*ibid.* III. iii. 205 (金庫をこっちのものにするんだ)/pricke *me* Bulcalfe—*2 Hen. IV* III. ii. 187 (ブルカーフをうんと突ついてくださいよ)/manage *me* your Cal-yuer—*ibid.* 292 (その小銃を使うんだ)/it…dryes *me* there all the foolish…Va-

pours—*ibid.* iv. iii. 104-6 [下の例 (14) 参照]/Say'st thou *me* so...?—2
Hen. VI II. i. 109 (きっとそうか)/A strange fellow here Writes *me*...—*Tr.*
 & *Cr.* III. iii. 95-6 (妙な男がここにこう書いています)/he rests (*me*) his minum
 —*Rom. & Jul.* II. iv. 22-3 (さっと 2 分音符分だけ間を置いて...)/Strike *me* the
 counterfet Matron—*Timon* IV. iii. 112 (まがいものの貴婦人などたたき切って
 くれ)/you'l beare *me* a bang for that—*Jul. Cæs.* III. iii. 20 (そんなことを言
 って、ひっぱたいてやるぞ)/draw *mee* a Cloathiers yard—*Lear* IV. vi. 88 (1
 ヤードものの弓を引くのじゃ)

(ia) “他動詞 + *me* + 目的語 + 前置詞付きの句”

ここと (ia) とでいう前置詞付きの句 (Prepositional phrase) とは、主として間
 接的対象を表わしたり場所の規定を行なったりすることにより、動詞と意味上ならび
 に構造上で密接に関連している句のことをいう。Ethical dative のあとに目的語を従
 え、さらにそのあとに前置詞付きの句を必要としている例は 7 個見受けられるが、つ
 ぎのものはとくに注目される。

(9) ...my Maister's a verie Iew, giue him a present, giue him a halter, ...
 ...giue *me* your present to one Maister Bassanio, who indcede giues rare new
 Liuories, ...—*Merch. V.* II. ii. 111-7. (おれの主人は根っからのユダヤ人なの
 だ。そのユダヤ人に贈り物をするんだって。やるんだったら首くり縄でもやるとい
 い。…どうかその贈り物をバサーニオーさまという方に上げてくださいよ。その方
 こそりっぱな新調のお仕着せを着せてくれる方だ)

強慾な主人の Shylock に愛想をつかし、新しい主人を求めて Bassanio のもとに
 走ろうとしている召使 Launcelot が、折しも Shylock に挨拶にやって来た父 Gobbo
 に言う言葉である。構造上で giue [give] *me* your present の表わすべき意図しない
 意味を、あとに to one Maister [Master] Bassanio を添加することによって、排斥
 して、それとはまったく別な論理関係の意味を表わす結果となっている現象である。
 giue *me* your present to~ は、'give your present, I pray you, to~' で表わすほ
 どの話者の懇望の気持ちを含んでいるが、前者は後者のよりも非分析的な表現である
 とともに、与格という統語機能の形態を論理的構造の中に端的に織り込んで、巧まざ
 る修辭の妙味を発揮させている。

(10) Thou art like one of these fellows, that when he enters the confines

of a Tauerne, claps *me* his Sword vpon the Table, and sayes, God send me no need of thee: ...—*Rom. & Jul.* III. i. 5-7. (酒屋の暖簾をくぐると、やにわに剣をテーブルにたたきつけて、「神よ、願わくはこいつを必要とさせたもうな」と言う手合いがいるが、おぬしはそれに似ている)

血の気の多い皮肉屋の Mercutio が友の Benvolio をからかって言う言葉である。ここで、Mercutio はみずからとんと音を立てるような仕草をしながら、語っているとも想像される。Ethical dative の *me* を動詞 *claps* のあとに表現していることは、話者のそういう情景を思わしめるに足る活気と迫真性を陳述内容に帯びさせている。つぎに、この型に属する他の 5 例を摘記しておく。

Hee thrusts *me* himselfe into the company of three or foure gentleman-like-dogs—*Two Gent.* iv. iv. 18-9 (こいつめ紳士らしい犬が 3, 4 匹いるところへぬっとはいりこんだ)/I haue writ *me* here a letter to her—*Merry W.* I. iii. 65 (ほら、あの女へ手紙を書いておいた) [*me* は再帰用法]/Put *me* a Calyuer into Warts hand—*2 Hen. IV* III. ii. 289-90 (ウォートの手に小銃を持たせな)/Conuey *me* Salisbury into his Tent—*1 Hen. VI.* I. iv. 110 (さあ、ソールズベリを天幕へ運んでくれ)/she came and puts *me* her white hand to his cloven chin—*Tr. & Cr.* I. i. 131-2 (あの人がやって来て、あの真っ白な手をトロイラスの顎の割れ目のところにあててね)

(ib) “他動詞 + *me* + 副詞 + 目的語”

ここと、(ic), (iib), (via) とでいう副詞とは、いわゆる副詞的小詞 (Adverbial particle) で、構造上で動詞に密接につながり、動作の場所や方向を規定するものである。この型に属する用例は 4 個あるが、そのうち、つぎのものをとりあげよう。

(11) Away Varlets, draw Bardolfe: Cut *me* off the villaines head: threw the Queane in the Channel. —*2 Hen. IV* II. i. 51-2. (こっば役人め、あっちへ行け。抜け、バードルフ。こいつの首をたたき切ってくれ。そのおかみを溝の中にほうり込め)

居酒屋へ悪人どもをつかまえにきた小役人に対し、Falstaff が吐きかけるように発する言葉である。論理的陳述の文脈では、当然 *me* を対格目的語、*off*~を前置詞付き副詞句とする *Cut me off the villain's head.* の意味を伝えるべきものであるが、

それと現実の文との間における統語機能と意味のずれに注目すべきである。このような情意的表現と理知的表現との間に認められるずれこそ、原文における迫力の源となるものである。

この型に属する他の3例は、つぎのものである。

pluck *me* out all the linnen—*Merry W.* iv. ii. 155-6 (その麻布をみんな出してしまえ)/cut *me* off the Heads of all the Faurorites—*1 Hen. IV.* iv. iii. 85-6 (寵臣たちの首もことごとく切ってしまったのです)/they set *me* up…that mongrel cur, Ajax, against that dog of as bad a kind, Achilles—*Tr. & Cr.* v. iv. 13-4 (かれらはあの雑種犬のエージャックスを同じ悪種犬のアキリーズと睨み合わせることにしたのだ) [この構造は精密には (ib) 型と (ia) 型との合体したものである]

(ic) “他動詞 + *me* + 目的語 + 副詞”

(ib) の場合にくらべ、副詞的小詞の意味がいっそう強調される。(ib) の場合には、外観上 Ethical dative の *me* に動詞と副詞的小詞とが前後から影響を与えているようであるが、この型の副詞的小詞には、そのような疑似影響力が感じられない。この型に属するのはつぎの1例だけであるが、これは (ia) が合体した構造のものである。

(12) Goe fetch them hither, if they denie to come

Swinge *me* them soundly forth vnto their husbands:

Away I say, and bring them hither straight.

—*Tam. Shr.* v. ii. 103-5.

(ふたりをここへ連れてお出で。いやだなんぞと言ったら、思い切りひっぱたいて亭主たちのところへ引っ立ててお出で。さあ、早く行ってここへすぐ連れてお出で)

Petruchio が今はすっかり従順になった悍婦の Katharina に言いつける言葉である。

(ii) “自動詞 + *me*”

4例のうち、つぎのものをあげる。

(13) Being entertain'd for a perfumer, as I was smoaking a musty roome,

comes *me* the Prince and Claudio, hand in hand in sad conference: ...——
Much Ado I. iii. 60-2. (たきもの係りをおおせつかり、かび臭い部屋をたきしめて
 おりますと、何と、ご領主さまとクロードオさまとが、手に手を取って何やらひ
 そみそと話し合いながらやってお出でになるのです)

Don John に家来の Borachio が語る言葉である。comes *me*…には、多少、comes
 to *me*…ほどの客観的意味が感ぜられるが、この場合、Borachio がはっと思った感じ
 を、Ethical dative としての *me* を動詞のあとに添加することによって、端的に伝え
 ようとしたのである。ちなみに、他の例にも見られることであるが、この種の伝達文
 が人物とその動作を現に聴者の面前に展開しつつあるもののように表わすきびきびし
 た力をもっており、そのような動作を描写する述語動詞形も、過去時制の文脈の中
 にありながら、現在時制で表現される。その結果、現在形の動詞と Ethical dative と
 がきびきびした文調の中でたがいに調和している。

その他の例を列挙すると、

her husband...comes *me* in the instant of our encounter——*Merry W.* III. v.
 72-3 (亭主のやつちょうど出会いの瞬間に来やがったんだ)/rap *me* well——*Tam.*
Shr. I. ii. 12 [下の例 (15) 参照]/I followed *me* close——*1 Hen. IV* II. iv. 241
 (おれはすぐあとを追い詰め…) [me は再帰用法]

(iia) “自動詞 + *me* + 前置詞付きの句”

まず、構文の後半に (i) も含むものであるが、つぎの例は注目に価しよう。

(14) A good Sherris-Sack hath a two-fold operation in it: ascends *me* into
 the Braine, dryes *me* there all the foolish, and dull, and cruddie Vapours,
 which enuiron it: ...——*2 Hen. IV* iv. iii. 103-7. (上等なシェリー酒は二重の
 働きをする。まずずーんと頭にのぼり、そこにわだかまっているぼーっとどんより
 とごってりした毒気をからからに吸い上げてしまってくる)

Falstaff が酒を飲まない冷淡な王子 John とあったあとに、John の人物を批判し
 ているくだりである。問題の構文の前半に“自動詞 + *me* + 前置詞付きの句”が見
 られるのであるが、この文脈では、it ascends *me* into the Braine は ‘it ascends
 into my brain’ を意味し、*me* はいわゆる所有与格 (Possessive dative) とも解され
 そうである。ここでは、シェリー酒の効能を Falstaff 自身だけについて述べている

のではなく、一般の人について述べているのは事実であるが、この *me* は、続く *dryes* [*dries*] *me*…の *me* とともに、かなり利害の与格に偏った Ethical dative であるというべきである。いずれにしても、酒好きの Falstaff が一般的な酒の効能を述べ立てるのに、つい熱を入れているのである。

つぎの引用では、ここで扱う (iia) 型の前後に (iib) 型と (ii) 型とが現われているが、Ethical dative の意味のないし統語的特徴を巧みに利用して、対話者相互間の誤解を執拗に捲き起こしている。喜劇場面における Shakespeare の言語才士の本領が遺憾なく発揮されているくだりである。

(15) *Petr.* Heere sirra Grumio, knocke I say.
Gr. Knocke sir? whom should I knocke?
 Is there any man ha's rebus'd your worship?
Petr. Villaine I say, knock *me* heere soundly.
Gr. Knocke you heere sir? Why sir, what am
 I sir, that I should knocke you heere sir.
Petr. Villain I say, knocke *me* at this gate,
 And rap *me* well, or Ile knocke your knaues pate.

—*Tam. Shr.* i. ii. 5–12.

(ペトルーチオ『おい、こら、グルーミオ、たたけ』 グルーミオ『え、たたけですって？ だれをたたくんです？ ご主人に無礼を言ったものでもいるんですかい』 ペトルーチオ『ばか、ここを力いっぱいたたいてくれと言うんだ』 グルーミオ『へ、ご主人をですかい。ご主人のここんとこをたたくなんて、どうしてあっしにできましょ』 ペトルーチオ『ばか、さあ、この門をたたいてくれ、早くたたかないと、お前の脳天をぶったたいてやるぞ』)

威勢がよくて性急な紳士 Petruchio が愚鈍な下男 Grumio を伴って、友人 Hortensio の家を訪ねて来て、ふたりがその門の前までさしかかったときの場面である。この文脈で *knock(e)* という動詞を自動詞と他動詞との両様に用いているところから談話の混乱が生じている。8 行目に Petruchio が Ethical dative を自動詞の *knock* に添えて言い直したのに、それを Grumio が *knock* を他動詞、*me* を対格としての目的語と考え込んでしまうところから、たいへんな誤解が生まれる。9行目から 10 行目にかけての Grumio の言葉では *knocke* が他動詞に用いられているのはもちろんであるが、それに応じる Petruchio の言葉のうち、12 行目の *knocke* が紛れもなく他

動詞として用いられているから、いよいよ事が紛糾し、おかし味を増す。そういう諧謔味はともかくとして、意思の正確な通達を目差す言語の一次的機能という観点からいえば、どうやら、この両者の言葉合戦は下男の Grumio のほうに軍配が上がりそうである。

つぎに、そのほかに“自動詞 + me + 前置詞付きの句”の型に属する8個の例を摘記しておく。

he steps *me* to her Trencher, and steales her Capons-leg—*Two Gent.* iv. iv. 8-9 (やつめつとお姫さまのお膳のところまで寄って行って、鳥の脚を1本ちよろまかしおった)/I...goes *me* to the fellow that whips the dogges—*ibid.* 16-8 (おれは犬の打ち役の男のところへ行って…) [me は再帰用法]/Come *me* to what was done to her—*Meas. for M.* II. i. 121 (これ、その女に対してしたことをしかと申せ)/Go hop *me* ouer euery kennell home—*Tam. Shr.* iv. iii. 98 (えい、どぶでも何でも飛び越えてさっさと帰ってしまえ)/scout *mee* for him at the corner of the Orchard like a bum-Baylie—*Twel. N.* III. iv. 193-4 (庭の隅のところで捕り方よろしくその男を見張っていてくれ)/the Vitall Commoners, and inland pettie Spirits, muster *me* all to their Captaine, the Heart—*2 Hen. IV* iv. iii. 119-20 (雑輩の小活力どもや内地のちび元気どもがみんな御大将の心臓のもとに駈せ参じて来る)/leape *me* ouer this Stoole, and runne away—*2 Hen. VI* II. i. 144 (この床机を飛び越えて逃げてみるがいいぞ)/winde *me* into him—*Lear* I. ii. 106 (あいつの本心を探ってくれ)

(iib) “自動詞 + me + 副詞”

Ethical dative の用いられる構造としては特徴的なものではあるが、me が利害の与格として論理的な意味を保持している、つぎのような現象が、まずあげられなければならない。

(16) *Hotsp.* Me thinks my Moity, North from Burton here,
In quantitie equals not one of yours:
See, how this Riuer comes *me* cranking in,
And cuts *me* from the best of all my Land,
A huge halfe Moone, a monstrous Cantle out.

.....

Mort. Yea, but marke how he beares his course,
 And runnes *me* vp, with like aduantage on the other side,
 Gelding the opposed Continent as much,
 As on the other side it takes from you.

—1 *Hen. IV* III. i. 96–111.

(ホットスパー『どうも、このバートンから北へかけてのわたしの分は、量からして、あんたたちの分と同じなようだ。ご覧なさい。ここへこの川が湾曲してはいり込んで来ていて、わたしの全領分のうちでも一番良い所から大きなけしからん三日月形を削り取ってしまっている…』…モーティマ『さよう、だが、ま、この流れ具合をご覧ください。わたしの方へもぐんぐん流れて来ていて、そちら側にも同じくらいの利益を与えていますよ。そちら側であなたから取った分のものをこちらの対岸で削り取って埋め合わせていますよ])

Hotspur, Mortimer などが Trent 川をはさんだ地域の地図を見ながら、戦勝によっておのれの領土となるべき地を確認し合っているところである。comes *me*…in, cuts *me* from~A huge halfe Moone [half moon] …out, runnes [runs] *me* vp [up] の3箇所のうち真ん中のものは、構造上は (ia) と (ic) の合体したものであるが、便宜上ここにいっしょに考察する。3個の *me* とも ‘against me,’ ‘to my injury’ というほどの意味を含む利害の与格であり、理知的な文脈を構成している。ただ、前置詞を介在させずに、*me* という単独な与格形を動詞の直後にいわば非分析的に表現している統語法は、情意表現としての Ethical dative の用法に共通した特色をはらんでいる。

つぎの例になると、文脈が理知的・客観的から情意的・主観的に傾いており、同種の外部構造に用いられている *me* も Ethical dative であると判定されよう。

(17) He presently, as Greatnesse knowes it selfe,
 Steps *me* a little higher then his Vow
 Made to my Father, while his flood was poore,
 Vpon the naked shore at Rauenspurgh:

—1 *Hen. IV* IV. iii. 74–7.

(王は自分の権力を意識するにつれ、自分のまだ賤かった時分にレーヴンスバーグの荒磯で、わたしの父に立てた誓約をいくぶん乗り越えるようなことにまで、たちまち手を伸ばしておられますぞ)

Hotspur が王の使者に、王のかつての恩人たちを虐待する非を責め立てている。文脈中では、Hotspur が王の自分の父への誓約を破った行為を Hotspur 自身に関することと意識していることを、*me* の使用の上に反映させている。

この型に属す他の 2 例は、つぎのものである。

she leans *me* out at her mistress chamber-window——*Much Ado* III. iii. 155
 (あの女がお嬢さんの部屋の窓口にもたれて…)/knock *me* heere soundly——*Tam.*
Shr. I. ii. 8 [上の例 (15) 参照]

B. you

(i) “他動詞 + you + 目的語”

you を含む構造のうち、統語上二重目的語を従いうる動詞 *last* を用いたつぎの例が、まず注目されよう。

(18) *Ham.* How long will a man lie 'ith' earth ere he rot? *Clo.* Ifaith, if he be not rotten before he die (as we haue many pocky Coarses now adaies, that will scarce hold the laying in) he will last *you* some eight yeare, or nine yeare. A Tanner will last *you* nine yeare.

——*Hamlet*. v. i. 178–84.

(ハムレット『人が地にはいつて腐るまで何年かかるかね』道化『それはね、死ぬ前から腐っているというんでなければ——この節は梅毒病みの死体がえらく殖えましてね、そういうのは地下じゃまず持ちはしません——そういうんでなかったら、8、9年持ちましような。なめし革屋だったら、9年持ちましよう』)

Hamlet と墓掘り人夫とが話をかわしているくだりである。he will last *you* some eight yeare (=years) における *you* が漠然と聴者を含めて陳述内容に関係する人を一般にさす、いわゆる総称的 (generic) 用法の *you* と考えることも可能であろう。ことに、*last* という動詞は These shoes will last *you* ten years という類型的な構文に用いられうる動詞である。もとの表現でも、地下に埋められる死体が持ち続ける期間に関心を寄せた Hamlet の問いに対して、墓掘り人夫が、その期間が Hamlet 自身にとって多少とも利害関係をもつものであるという意識を働かせながら、総称的 *you* の意味も利かせて、*you* を *last* のあとに表現したものと解釈されよう。

とくにつぎの *A Tanner will last you nine ycare (=years)* は、常識的に考えられる商売人としてなめし革屋の社会的行為を暗示するように、前の文と平行した構造にしておき、英語の統語構造の上に諧謔的効果を巧みに反映させた絶妙な例といえる。これらの *you* は、外形上利害の与格としての統語的資格を保持しておりながら、その中から自然と情意的な *Ethical dative* としての価値を発揮させられている。

つぎの例においても、統語構造上から *you* の理知的機能を優に意識させる。

(19) *John layes you plots: the times conspire with you,
For he that steepes his safetie in true blood,
Shall finde but bloodie safety, and vntrue,*

—*John III. iv. 146-8.*

(ジョンが何かもくろめば、時勢があんたの味方をしてくれます。正しい血に浸りながら身の安全を図ろうとする者は、血を流したり正しくないことをしないわけにはいきません)

老獺な法王の大使 *Pandulph* がフランス太子 *Lewis* を扇動して、イギリス王 *John* 討伐に兵を起こさせようとしている。この文脈で *lohn [John] layes [lays] you plots* の *you* には明らかに ‘against you’ の意味が込められているが、またもとの *you* そのものに、それほどの理知的な意味関係が顕現化されているともいえない。いづれにしても、話者が *you* を述語動詞 *layes* に添加したことは、それだけ、その述語動詞の表わす行為が聴者自身に切実な迫力をもつものであることを端的に示している。ここでも、*you* に、利害の与格としての本来の機能から派生的な *Ethical dative* としての機能への自然な推移が認められる。

Ethical dative としての *you* の主観的・情意的性格をもっと明瞭にしている例を付け加えよう。

(20) *...let mee tell you in your eare, shee's as fartuous a ciuill modest wife, and one (I tell you) that will not misse you morning nor euening prayer, as any is in Windsor, who ere bee the other: ...* —*Merry W. II. ii. 100-4.* (お耳に入れておきますがね、その方はウィンザー中のどこのどなたさまにくらべてもひけをとらない、誠にごりっばなしとやかなお内儀でいらっしゃいますね、朝晩のお祈りをついぞ欠かすことのないといったお方なんでございますよ)

饒舌な女中の *Quickly* 夫人が *Falstaff* に語る言葉である。話に熱を入れて、聴者

の注意を引こうとして, let mee [me] tell you in your eare [ear] や I tell you という分析的表現を陳述の客観的主体に付け加えるだけでは満足せず, さらに, 陳述の内部に没入させて, Ethical dative としての you を動詞の misse [miss] と目的語の morning nor evening [evening] prayer の間に表現している。

ほかに, “他動詞 + you + 目的語” の型に属するものに, つぎの 5 例がある。

I will find *you* twentie lasciuious Turtles ere one chaste man—*Merry W.* II. i. 82-3 (淫乱な鳩を 20 羽も見付けたあとでなけりゃ, 浮わ気でない男などひとりだって見付かりゃしない)/what offence hath this man made *you*, Sir? —*Meas. for M.* III. ii. 15 (この男どんな罪を犯しましたかな)/hee would haue... carried *you* a fore-hand Shaft at foureteene, and foureteene and a halfe—*2 Hen. IV* III. ii. 51-3 (大かぶら矢を 290 ヤードも向こうへ飛ばしたものでしたがね)/hee would manage *you* his Peece thus—*ibid.* 301 [下の例 (24) 参照]/they will learne *you* by rote where Seruices were done—*Hen. V* III. vi. 75 (どこで戦争があったかということをよくそらんじています)

(ia) “他動詞 + you + 間接目的語 + 直接目的語”

この型に属するものは 1 例だけであるが, (ia) 型の例 (9) について述べたと同様の統語構造上の規制が Ethical dative の用法に影響している。ここでは, “他動詞 + you (間接目的語) + 直接目的語” と解したい構造上の誘惑を, 実際に起こる you を含まない “他動詞 + 間接目的語 + 直接目的語” の枠で除去して, その結果, かえて you に Ethical dative としての機能を浮き立たせているといえる。

(21) ...but notwithstanding man, Ile doe *you* your Master what good I can: ...—*Merry W.* I. iv. 96-7. (でもかまいはしない。わたしあんたの旦那さんにできるだけのことをしてあげますから)

女中の Quickly が下男の Simple に言う言葉である。一見して doe [do] のあとの *you* [you] と your Master とは同格的でたがいに交替しうる要素であるかのように用いられていて, じつは, 前者が後者を引き立てるために挿入された冗語にすぎない, と知られる点にきびきびした言葉遣いの妙味がある。

(ii) “自動詞 + you”

この型に属する例として, つぎのものをあげなければならない。もっとも, あとの

you は First Folio では省かれている。

(22) I graunt you friends, if that you should fright the Ladies out of their Wittes, they should haue no more discretion but to hang vs: but I will aggrauate my voyce so, that I will roare *you* as gently as any sucking Doue; I will roare (*you*) and 'twere any Nightingale. — *Mids. N. D.* 1. ii. 81-6. (なるほどな、お女中たちがおっかながって気が狂うことにでもなったら、あの人たちは見境もなくなるたちだから、おれたちを縛り首にするかもしれないな。だけど、おれ、思い切り声を細っこくして、鳩のひなみたいにそーっと唸ってやるよ。うぐいすみたいに唸ってみせるよ。)

アテネの公爵の新婚祝いに際し、町の職人たちが余興の素人芝居をしようと相談している。出し物は Pyramus と Thisbe で、ライオン役をだれがやるかという段になると、すでに Pyramus 役をあてがわれている織屋の Bottom が、おれにライオン役もさせろと言い出している。roare [roar] という動詞を修飾する副詞語句が常識的な場合とは逆に、静かなやさしい様態を表わす意味のものである点に、まず、逆説的で皮肉な滑稽味がある。(その前に、*moderate my voice* とでも言うべきところに、誤って *aggrauate [=make greater] my voyce* と言っているところに、すでに同じ滑稽味が出ている。) Shakespeare は、ここで、強いて常識的発想に逆らって逆説的諧謔味をねらっているのであるが、その効果を *you* の添加が一段と高めている。それは、あたかも *roare* に対し客観的な対象を示すかのような位置に表現されながら、じつは冗語的強意語の役を勤めている点に、逆説的文脈に適合しているおかし味が認められる。

(23) Where's Wart? you see what ragged appearance it is: hes shall charge *you*, and discharge *you*, with the motion of a Pewterers Hammer: come off, and on, swifter than hee that gibbers on the Brewers Bucket. — *2 Hen. IV* III. ii. 278-84. (ウォートはどうです? いかにもいかつい格好をしているでしょうに。これで、しるめ鍛冶のかなづちそこのけの素速さで弾込めもすりゃ射ち出しもする。突進もすりゃ退却もしまさあ。酒屋が酒樽をつるすときの手速さよりもまだ速くね)

Falstaff が Shallow 判事らに新兵候補選びをしてやりながら語っている。Wart の兵術の機敏さを奇抜な比喩をふんだんに使って褒め上げている。普通、他動詞に用い

ることの多い charge と discharge を、自動詞として Ethical dative の you を添えて用い、いや応なしに聴者の注意を話の中身に引きずり込もうとしている。

ほかに、この型に属するものがつぎの2例である。

shee will sit you—*Much Ado* II. iii. 116 (それ、じっとすわって…)/he will weep you—*Tr. & Cr.* I. ii. 188-9 (あの人は泣こうとしていなさる)

(*ia*) “自動詞 + you + 副詞”

この型には、つぎの例に見られる2個の Ethical dative が属する。同じ文脈中に現われる (*i*) の例も、便宜上いっしょに観察する。

(24) …there was a little quiuer fellow, and hee would manage you his Peece thus: and hee would about, and about, and come you in, and come you in:…—*2 Hen. IV* III. ii. 300-3. (ひとり小男ですばしっこいのがいましたっけ。その武器をこれこういうふうに掲げてね。ぐるぐるっと走りまわっては、こっちへ来る、こっちへ来る)

判事 Shallow が Falstaff に身振りまじりに機敏な射手の仕草を生々しく語って聞かせている。活力に富む自由奔放な談話ぶりが、冗語としての Ethical dative を容認した文体をかもし出している。

III

以上、文芸的才腕と言語表現力の点で正に融通無碍といえる Shakespeare が、Ethical dative をいかに駆使して、その文学的伝達の意図をかなええたかを、なるべく具体的文脈に即し、個々の例証に基づいて観察した。Ethical dative は西欧語の統語構造の中に芽生えた情意的強意法であるが、本稿では、英語という土壌の中にそれが言語芸術家の手によって、いかに活用され開花させられたかに注意を傾けた。それは庶民的な精力にあふれるエリザベス朝の文士の筆によって、十二分に運用の妙を発揮しうる機会を与えられたことは事実である。筆者はいま、Ethical dative が Shakespeare に続く現代に至るまでの作家にどのように使用され、英語統語法史にその命脈を保持させてきているかを、実証する余裕を持ち合わせていない。ただ、F. Th. Visser, *An Historical Syntax of the English Language* I (Leiden, 1963), § 695 の歴史的概説を借用させてもらえば、Elizabeth 朝 (1558-1603) および James I 世時代

(1603-25)における口語調散文体の戯曲に最高潮に達し、のち18世紀を通じて下降線を辿り、19世紀にいちじるしく減退し、⁽¹²⁾ついに今日の英語では自然な語法にほとんど見受けられなくなっている、という。いま、近代後期の作家たちの用いる Ethical dative の例を見ても、その統語的環境は、IIで観察した Shakespeare におけるものの範囲を出ることがない。要するに、Shakespeare によってその統語的効能を十二分に活用された Ethical dative の用法は、英語におけるひとつの限界を象徴しているときえいえるのである。

このように、ドイツ語やフランス語の場合にくらべ、Ethical dative が新しい時代の英語統語法の特徴的制約を被ることの多かったことは事実である。現代英語の口語体から、しばしば Ethical dative に相当するものとして、

(1) 'Don't'ee mind him, *there's a dear*', said Marian. —T. Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* [1912] XLIII. (「ね、あの人の言うことなど気にすることはな
いわ」)とメアリアンが言った)

(2) 'We needn't start till half-past seven, *you know*.' —A. Huxley, *The Tullotson Banquet* [1922] III. (「まだ7時半までは出かけなくてもいいんですからね」)

(3) "It ain't so much fun, bein' poor in a big city like London, *I'll say!*" —W. Cather, *Neighbour Rosicky* [1928] v. (「ロンドンみたいな大都会で貧乏暮らしをするなんて、あまりぞっとしたことじゃないからね」)

(4) '*I tell you*, I shan't be sorry,' he said, ... —J. Wain, *Nuncle* [1960]. (「いや、ね、わたしは別に後悔はしないですよ」と、かれは言った)

におけるようないわゆる外位置的 (Extra-positional) の表現があげられることがある。いかにも、これらは、陳述の主体全体に対する意味関係の点と、しばしば言語形式上で1人称または2人称の代名詞の要素を含んでいる点で、本来の Ethical dative に対等であるといえよう。しかし、これらはあくまでも、客観的陳述中の動詞そのものとは統語的な関係のない、主観的表現であり、いわば、表現全体が客観的要素と主観的要素との並列されたものである。Shakespeare に見られる表現全体の外形が一脈

(12) ただし、19世紀の後半でも擬古的な文体で制作をした R. L. Stevenson の作 *Black Arrow* (1888) には、Ethical dative が頻用されている、と市河三喜博士が『英文法研究』(研究社 1924) "VII. Ethical Dative" (p. 41 f.) で紹介している。

の客観的陳述であり、その中に Ethical dative という主観的実質を備えた要素が自然に渾然と融和させられているものとは、異質的といわなければならない。

要するに、本来の Ethical dative は現代英語の統語機構の内部に受け入れられる余地を見出せずにいるのであり、このことは英語の歴史的本質に根差した客観的・分析的・合目的表現法の傾向が近代後期においてますます助長され固定されてきているという事実に戻せられよう。今後、はたして、新時代に即応した精気と生彩に富む新しい文体の作家が、この伝統的な情意表現法に新たな活路を見出し、英語の統語的表現力の多様化に寄与しうようになるかということは、予断を許さぬ問題である。たとえ、そのような自由で大胆な新文体が出現することがあるとしても、一般にはかなりの抵抗を受け、統語法発達の新局面を打ち開くまでには至りそうもないというのが、やはり穏当な観測であろう。